

シモーヌ・ヴェイユの思想における 「人間の尊厳」の概念 —— その形成における工場体験の役割¹⁾ ——

辻 村 暁 子

序 論

シモーヌ・ヴェイユ（1909-1943）は第一次、第二次両大戦間の激動の時代を生きた思想家であり、彼女の思索活動は対立して見える二つの側面によって特徴づけられている。ヴェイユは生前、若干の政治活動家たちにはその鋭い政治分析によって知られた存在だったが、思想家として広く認知されるようになったのは戦後になってからのことである。1947年、ヴェイユの思索ノートをもとにした *La pesanteur et la grâce* が発表されたが、キリスト教作家ギュスターヴ・ティボンによる編纂のしかたも影響して、ヴェイユはまず神秘主義的宗教思索家として位置づけられることになった。しかし50年代以降、それとは別のヴェイユのイメージが現れることになる。ガリマール社からカミュの編纂によってヴェイユのテキストがシリーズで出版され、彼女の思想がより包括的な形で紹介されることによって、生前から彼女を知っていた人々にとってはむしろ馴染み深い面影、すなわち、時代の問題に対する旺盛なコミットメントを特徴とする、戦後のサルトルに先駆けたアンガージュマンの知識人という像が現れたのである。「二人のシモーヌ」（« Simone militante » « Simone religieuse »）という言い方は、シモーヌ・ヴェイユという一人の人間についての、この二つの対立する像に由来している。

ムレール神父は *Littérature du XX^e siècle et christianisme* の中でヴェイユについて触れ、ヴェイユ思想の分水嶺を1937年とした²⁾。この区分によれば、前半の時期には、哲学教師としての最初のキャリア、極左の闘士としての活発な政治的活動、そしてパリの工場での就労経験、1936年夏のスペイン市民戦争参戦が含まれる。そして後半の時期にはいくつかの神秘的体験があり、ナチスによるフランス侵攻に伴う非占領地帯への移住、ついでニューヨークへの移住、両親をアメリカに残しての「自由フランス」への参加、そしてロンドンでの孤独な死がある。大木健はヴェイユのテキスト内容の傾向からムレール神父の区分の仕方を妥当とし、「この変貌期の分析はシモーヌ・ヴェイユ研究にとって最も重要であると同時に最も困難な課題である」³⁾と述べた。

対立しているように見える二つのイメージを、一人の人物の内的必然性による変貌の結果と捉える考え方、とくに工場就労やスペイン市民戦争参戦をヴェイユの思想形成にとってそれぞれ重要な体験と見て、これらの延長線上に神秘主義者ヴェイユが生まれたとする考え方は、現在では多くの研究者たちによって共有されている。しかし逆に、この捉え方が研究者たちにとってあま

りに自然になっているために、かえってこれらの経験の内実を具体的に検討し問題化しようとする試みがなされないままになっているとも言えるのではないか。つまり、「工場体験」「スペインでの体験」と一言で言ってすませてしまうことで、漠然としたイメージのもとにこの具体的な体験を閉じこめてしまっているのではないかと思われるのである。この二つの体験が後期の思想に及ぼした影響力を認識するのならば、これらの経験を通して、どんな問題意識がどんな具体的な出来事の中で醸成されたのかということを常に念頭に置こうとすることが—とくにヴェイユのような、常に行動と思想とが緊密に結びついている思想家について考える場合—必要不可欠であろう。

「人間の尊厳」という概念は、ヴェイユが工場生活を終える頃からスペイン市民戦争へ参戦するまでの一年近くの間にかかれたテキストに頻繁に登場するものであった。彼女はこの言葉をキーワードとして用い、自身が工場経験で経験したことを伝えようとしていたのだ。ヴェイユが自己尊敬の感情を非常に重要なものとして考えていたことは、ヴェイユの伝記作者であるペトルマンを始め、アメリカの精神分析学者でありヴェイユ研究者でもあるコールズによってもはっきりと指摘されていることである。ヴェイユにとって「人間の尊厳」という概念は、まさに自己尊敬の感情についての問題意識を提示するものである。しかしこれまでのヴェイユ研究において、この概念は十分に検討されているとは言いがたい。「民衆文化の観点からみた人間の尊厳の問題について」⁴⁾という論文を挙げることもできるが、この論文においては、ヴェイユの最晩年の著作 *L'Enracinement* における「労働者の尊厳」の問題が主に扱われており、ヴェイユが工場において経験した精神的葛藤や、それに伴ってあらわれる問題意識には触れられていない。

本稿においては、「工場日記」や、友人たちへの手紙を分析することによって、女工としてのヴェイユの具体的な日常に焦点をあて、この工場での経験をめぐって提出された「人間の尊厳」の概念を検討していきたいと思う。

1. 二つの「尊厳」

1934年12月、パリのアルストム電機工場に未熟練女工として入った時、ヴェイユは25歳だった。彼女のいかにも肉体労働者らしくない手を見て、同僚たちは試験に失敗した学生か何かだろうと想像していたようである⁵⁾。1934年といえば、世界恐慌の影響をうけてフランス経済は厳しい状態にあり、労働条件は非常に悪く、失業率も高かった。ヴェイユ自身も8ヶ月にわたる女工生活の中で2度解雇され、職業安定所に通って職を探し、計3カ所の工場で働いた。

ヴェイユが工場で働いていた間につけていた記録は、「工場日記」として彼女の死後に出版された。日記にはその日の仕事内容、給料計算が書き込んであり、また上司や同僚たちの人物評、彼らの諍いや女工同士の日常的な雑談の記録も散見されるが、「人間の尊厳」という言葉は日記の最後になってから、おそらく工場生活を終えた直後の1935年8月に書かれたと思われる記述にのみ見られる。そしてこの頃から翌年の6月におよぼ約1年、ヴェイユは友人のテヴノン夫人や

教え子の父親を介して知り合ったある工場技師長との文通の中で、頻繁にこの語を用いて、自身が経験した労働者の厳しい生活やそこでの生活感情について語っている。彼女はブルジュの女子高等中学校で哲学を教えていたのだが、1936年7月、スペイン市民戦争勃発と共にアラゴン戦線にむけて旅立つことになる。「人間の尊厳」という言葉は、この時期のヴェイユにとって、自身の工場体験から得た問題意識を支える重要な言葉であったと考えられる。

次の引用は1935年8月、工場生活の終わりに臨んで彼女がテヴノン夫人にあてた手紙の一節である。

Pour moi, moi personnellement, voici ce que ça a voulu dire, travailler en usine. Ça a voulu dire que toutes les raisons extérieures (je les avais crues intérieures, auparavant) sur lesquelles s'appuyaient pour moi le sentiment de ma dignité, le respect de moi-même ont été en deux ou trois semaines radicalement brisées sous le coup d'une contrainte brutale et quotidienne. [...] Quand la maladie m'a contrainte à m'arrêter, j'ai pris pleinement conscience de l'abaissement où je tombais, je me suis jurée de subir cette existence jusqu'au jour où je parviendrais, en dépit d'elle, à me ressaisir. Je me suis tenu parole. Lentement, dans la souffrance, j'ai reconquis à travers l'esclavage le sentiment de ma dignité d'être humain, un sentiment qui ne s'appuyait sur rien d'extérieur cette fois, et toujours accompagné de la conscience que je n'avais aucun droit à rien, que chaque instant libre de souffrances et d'humiliations devait être reçu comme une grâce, comme le simple effet de hasards favorables.⁶⁾

ここでは、二つの「尊厳」、すなわち工場生活でうち砕かれた尊厳の感情と、その後取り戻した尊厳の感情とが、対比されて示されている。そして前者は外的理由に支えられた感情、後者は外的なものを何一つ拠り所にしない感情と表現されている。この対立の図式は、同時期に書かれた日記の記述にも見られるものである。

Le sentiment de la dignité personnelle tel qu'il a été fabriqué par la société est brisé. Il faut s'en forger un autre (bien que l'épuisement éteigne la conscience de sa propre faculté de penser!). M'efforcer de conserver cet autre.

On se rend compte enfin de sa propre importance.⁷⁾

dignitéという言葉は、一般に尊厳、威厳、プライド、など文脈によってそのニュアンスを解さなければならないが、上の二つの引用から、ヴェイユがこの言葉によって「人間の尊厳」を語ろうとしていること、また彼女が「人間の尊厳」を、人間が自らを尊いものと思う感情、「自尊心」として捉えているということを理解することができる。

我々はヴェイユの工場日記を分析しながら、彼女が女工として生活する中で問題にするに至った二つの「尊厳」の内容を明確にし、この二つの「尊厳」を対立させることで彼女が言おうとしていることを探ってみることにしよう。そして彼女が工場で働き始める直前に書き上げた長い論

文「自由と社会的抑圧の原因についての考察」なども参照しながら、工場体験が彼女に与えた変化についても考えてみることにしよう。

2. 工場生活の経験

(1) 考える力の麻痺

「工場日記」においては、肉体的疲労や苦痛についての記述が絶えない。1936年にレオン・ブルムの人民戦線内閣が成立し、フランス各地で起こったストの成果として労働者の労働条件は随分改善されたが、ヴェイユが工場で働いていた1934年から35年にかけては経済状態の悪化もあり、フランスの労働者にとっては暗黒時代であった。ノルマの厳しさ、体力的な限界状態、出来高払いゆえに緩められない緊張感が、工場生活の間、常にヴェイユを支配することになる。

(Quatrième semaine [du 24 à 29 déc].)

Vertige de la vitesse. (Surtout quand pour s'y jeter il faut vaincre fatigue, maux de tête, écoeurement).⁸⁾

Mardi 15 [janv.].

[...]

8h... : colliers avec Biol. Très grosse presse (emboutisseuse) — pièces très lourdes (1kg. ?). Il y en aura à faire 250. Payé 3,50F%. Faut graisser chaque pièce, et l'outil à chaque fois. Travail très dur : debout, pièces lourdes. Suis mal en point : mal aux oreilles, à la tête...⁹⁾

「人間の尊厳」という、ヨーロッパの伝統の中で常に抽象的語彙によって議論されてきた概念を問題にするにあたって、「工場日記」の引用やそれをもとにした分析は、あまりに些末事に関わりすぎていると思われる向きもあるかもしれない。しかし、前章に引用したテヴノン夫人への手紙からもわかるように、ヴェイユにおける二つの「尊厳」は、常に工場での日常と関連づけて問題にされていたのである。最初の尊厳の感情がうち砕かれたのは、「毎日の生活の残忍な圧迫のもとで」であり、新たな尊厳を獲得したのは、工場での「隷属状態にありながら」であった。つまりヴェイユにとって「人間の尊厳」の問題は、ヴェイユの工場での日常、つまり毎日の具体的な労働、周囲の人々との日常的な関わり方、これらを把握することなしには理解されえないであろうと思われる。「工場日記」はこれまで補助的な資料としてのみ扱われ議論の対象にされたことはなかったが、本稿においては、以上のような考え方から、「工場日記」にあらわれてくるヴェイユの具体的な日常に常に留意しながら、論を進めていくことにしたいと思う。

へとへとにくたびれた地下鉄での帰り道、ヴェイユの目は必死に空いた座席を探してしまう。疲れのあまり物も食べられず、眠れないこともしばしばだった。ヴェイユは持病の頭痛に苦しめ

られたが、同僚の女工たちの中には、卵管炎、結核、慢性気管支炎を患う者もあり、また機械で指や髪を切断される者も少なくはなかった。きつい労働を毎日課せられることによって起こった自身の内的変化を、ヴェイユはある日の日記に書き付ける。この後、程なくしてヴェイユは病気のため工場労働から一時退くことになる。つまりこの記述は、前章にあげたテヴノン夫人への手紙によれば、「外的な理由を拠り所にした尊厳の感情、自らを敬う感情が […] 徹底的に崩されてしまった」時期のものである。

L'épuisement finit par me faire oublier les raisons véritables de mon séjour en usine, rend presque invincible pour moi la tentation la plus forte que comporte cette vie : celle de ne plus penser, seul et unique moyen de ne pas souffrir. C'est seulement le samedi après-midi et le dimanche que me reviennent des souvenirs, des lambeaux d'idées, que je me souviens que je suis aussi un être pensant. Effroi qui me saisit en constatant la dépendance où je me trouve à l'égard des circonstances extérieures : il suffirait qu'elles me contraignent un jour à un travail sans repos hebdomadaire — ce qui après tout est toujours possible — et je deviendrais une bête de somme, docile et résignée[...].¹⁰⁾

彼女を愕然とさせたのは、工場での生活を送るうちに自身の中に芽生えた、「考えることをしない誘惑」である。ここで日記の記述の内容を明確に考えるために、工場へ入る前のヴェイユの思想を一度振り返っておきたい。

ヴェイユは工場生活に入る直前、それまでの政治的活動・思索の総決算ともいえる長い論文「自由と社会的抑圧の原因についての考察」（以下、「考察」と略す）を書きあげている。大学でアグレジェの資格をとり社会に出てからの3年間、彼女はル・ピュイ、オセール、ロアンヌなど地方で哲学教師をしながら革命的サンディカリストたちと行動を共にし、幾つもの政治論文を雑誌に投稿していた。1933年にはソビエトの社会主義を徹底して批判した論文を発表して物議をかもし、ソビエトを真の労働者国家とみなすことでおおかた一致していたフランスの闘士たちの間で孤立を深めていた¹¹⁾。彼女によれば、ソビエトは労働者国家であるどころか、その内実は資本主義の国家よりもさらに抑圧的となった「官僚的軍事的機構」たる国家にすぎない。トロツキーが言うような、官僚主義的歪曲を伴った「労働者国家」などではないのだった。

彼女のソビエト批判の根幹、そして「考察」の論文の根幹をなすのは、人間個人の価値に対する確信であった。「社会が個人に従属すること、これが真の民主主義の定義であり、また社会主義の定義でもある」¹²⁾ 1933年の論文「展望 われわれはプロレタリア革命に向かっているか？」（以下、「展望」と略す）において、彼女はこうに明言している。

ここで彼女が「個人」というとき、この言葉は「個人の思考」と読み替えることもできる。「思考はまさしく人間の最高の尊厳である。」¹³⁾ 「考察」においてヴェイユはこうに言う。この時期のヴェイユは、人間の「自由」も「尊厳」も、「思考」の作用によって定義している。

La liberté véritable ne se définit pas par un rapport entre le désir et la satisfaction, mais par un

rapport entre la pensée et l'action ; serait tout à fait libre l'homme dont toutes les actions procéderaient d'un jugement préalable concernant la fin qu'il se propose et l'enchaînement des moyens propres à amener cette fin.¹⁴⁾

このように語るヴェイユは、「労働者の尊厳」を社会の中心に据えたいと願う革命的サンディカリストたちと理想を共にしていると言える。ヴェイユはこの理想を、デカルト、ベーコン、ゲーテ、ルソー、ブルドン、マルクスの系譜に連なるものとして位置づけている。ヴェイユはマルクスの「プロレタリア独裁」の理論を受け容れず、彼の思想に見られる生産至上主義を厳しく批判してはいるが、その反面マルクスの思想の人間主義的側面には共感を抱いており、その意味で、彼女はルカーチやマルクーゼら西欧マルクス主義者たちと近い所にもとも考えられる。

ここで「考察」の詳しい内容に踏み込むことはしないが、この論文について理解しておきたいことは、ヴェイユが「現代のナショナリスト的、権威主義的思潮の優勢に対抗する手段はなにか」という問いの下に歴史的・経済的分析を押しすすめる、自然と人間、権力と人間集団、などの観点から人間社会の精緻な分析を重ねていたということ、しかし彼女が分析に踏み込めば踏み込むほど、抑圧社会が消滅しない仕組み、次々と新しい体制に受け継がれて存続していく必然が明らかになってしまい、結局は人類にとって破滅的な展望しか思い描けなくなるというジレンマに彼女が陥ってしまうということである。この論調は、1933年の論文「展望」におけるソビエト批判の頃から濃厚であった。

現代は、生産労働、政治、経済、科学、すべての領域において「個人を凌駕する全体」の中で「単に調整するというだけの職能」、つまり官僚的職能が幅をきかせるようになっている、とヴェイユは言う。人間社会を構成する仕組みの何もかもが、個人の知性と思考では捉えられないほどに、規模が大きくなっているからだ¹⁵⁾。官僚的機構とは、「部品が人間で歯車装置は規則と報告と統計でできている不思議な機械」である¹⁶⁾。

Jamais l'individu n'a été livré à une collectivité aveugle, et jamais les hommes n'ont été plus incapables non seulement de soumettre leurs actions à leurs pensées, mais même de penser.¹⁷⁾

しかし同時にヴェイユはこう言う。

Dans une pareille situation, que peuvent faire ceux qui s'obstinent encore, envers et contre tout, à respecter la dignité humaine en eux-mêmes et chez autrui ? Rien, sinon s'efforcer de mettre un peu de jeu dans les rouages de la machine qui nous broie ; saisir toutes les occasions de réveiller un peu la pensée partout où ils le peuvent ; [...].¹⁸⁾

ソビエトの試みは、人間の解放という観点から見れば明らかな失敗であり、ひとつの抑圧制度を別の抑圧制度に代えた結果に終わるであろう—1933年の論文「展望」においては、このような

予測がなされていた。しかし、たとえこれから起こりうる「革命」の見通しに希望を抱きうる要素が一つもないとしても、世の中の全体主義的体制への移行に歯止めをかけようとする試みがすべて失敗しても、希望が一つだけ残されているとヴェイユは考える。「世界の何ものも我々が明晰であることを妨げることはできない。」¹⁹⁾つまり明晰であることさえできれば（我々を粉碎する力を我々が理解することができ、努力の目標を明晰に考えるよう努めるならば）、たとえ歴史の中で、社会の中で、個人として抗するすべを持たず死んでいくとしても、決して犬死にはない、と彼女は言うのである。ペトルマンは、この論文が左派の闘士たちの間に巻き起こした非常な称賛、とまどい、反発を、ヴェイユの伝記の中で描いている。トロツキーは、この翌年、亡命中にパリのヴェイユ宅で彼女とソビエト革命の成果とソビエト国家の実質をめぐる激しい議論をすることになるが、彼は「展望」におけるソビエト国家についての彼女の分析を認めながらも、パスカルの「考える葦」を思わせるこの発言に対しては、「古くさいリベラリズム」と揶揄せずにはいられなかった²⁰⁾。

ところが女工になったヴェイユにとって、いまや考えることは苦しむことであり、もはや考えたくないという誘惑は抗いがたいものとなっているというのである。テヴノン夫人への手紙には、「こういう状況では思考は縮こまり、収縮してしまいます。ちょうど、メスを前にして肉体が縮こまるように。“意識をもつ”ことは不可能なのです」²¹⁾と書かれており、工場生活において思考しないでいることが、ヴェイユにとって一つの精神状態というよりも、むしろ肉体的反応や反射に近いイメージで捉えられているということがわかる²²⁾。

「少しでも思考を目覚めさせる機会をとらえようとする」ことは、哲学教師としてならば実現可能な理想であると言えよう。ヴェイユは哲学教師としては非常に優秀であり、熱意にあふれていた。校長をはじめ視学官ら、行政側の要求とはたびたび衝突したが、彼女は独自の方法をたぬいて、自分で考える力を生徒達に養わせようと努力していた。自身の信条は貫くべきである。そして発言したことには責任をもたなければならない。ヴェイユは工場日記の最初のページに『イーリアス』からの引用「心ならずも、苛酷な必然の定めの下で」を書き付けているが、苛酷な必然の下で現実には人はいかにどのように生きうのかということについては、そのような状況で生きたことのない人間には語る資格はないのかもしれない。「私はすべての分野において、自分の思想を事実との接触によって検討してみることを望んでいるだけです。私にとっては、常に知的誠実さが第一の義務なのだということを信じてください。」²³⁾後にヴェイユは、工場技師長への手紙の中でこう書いていた。「思考をめざめさせる」という目的が努力次第で可能であるような環境自体が、実際には多くの人とは関わりが深いものなのかもしれない。

厳しい肉体労働を課せられ、「考える」ことなどまわりから期待されていない女工という立場にいてことによって、つまり「外的な条件」次第で、人間の内面的な価値、天与のもの、人間の尊厳の拠り所とそれまで思われていたものさえも、いかようにでも左右されてしまう。この事実、ヴェイユは愕然とするのである。「外的理由に依って成り立っていた尊厳」とは、極度の疲労のない肉体的に安全な地帯にいてこそその「考える」能力であり、その人間を取り巻く外的状況が変われば、いつでもその人から取り上げられるものであった。まずはこのように考えられるで

あろう。不安定な外的状況に依拠して開花する性質は、「人間の尊厳」を心から信じる根拠とはなり得ないであろう。誰がどんな状況におかれても変わらない一点をもって初めて、「人間の尊厳」を語ることが可能になるであろう。

しかしここまでの図式的な理解だけでは、日記の告白に滲むヴェイユの苦悩と呆然自失とを十分に理解することはできない。平日には無我夢中で働き、土日になると途切れていた思考が戻ってくるが、それは断片的なものでしかない。「考えられない」人間とは、自身の中に連続性を認められない人間というイメージである。思考の断片が戻ってくる以外の時は、「無感覚」となっている。なぜ、この「無感覚」をふりきって思考しようとするのがそれほどの苦しみとなるのか。パスカルはこう言っている。「私は思考のない人間を想像することはできない。それは石か、獣であろう。」²⁴⁾ 思考できなくなってしまうは、人間を人間たらしめるものは、もう人間には残っていないということになるのであろうか。

(2) 防ぎようのない自己軽蔑

ヴェイユが工場生活における隷従の要素としてあげているのは、「スピードと命令」であった。極度の肉体的苦痛に加えて、工場生活でヴェイユをさいなんだのは、上司たちによる理不尽で粗暴な扱いであった。

未熟練女工は工場内で一番下の地位である。「工場日記」によれば、彼女たちは工場長、職工長、班長、調整工らの指示にその都度従って働く。調整工は女工たちが使う機械を、目的にあわせて随時調整するのだが、直接的に女工たちに接して命令を下したり仕事を割り振ったりする役割は、ヴェイユの日記から察するに、彼らが担うことが多かったようだ。ヴェイユはある日の日記に「調整工において人間的性質が大事であること」と書くが、これこそむなしい願いである。

他人に罵声をあびせたり、明らかに権柄づくの態度をとったりすることは、通常対等な立場での人間関係にはありえない行為であるが、女工と上司の間では日常茶飯であった。もちろん人によって粗暴さに程度の差も頻度の差もある。重要なのは、そのような粗暴さが常に許されてしまう人間関係が工場の中で自然と成り立っていたということである。荒々しい扱いは、女工たちの作業の遅さや誤りについてのある種「正当な」理由に基づく場合もあったが、そればかりでもなかった。明らかに理不尽な理由による上役の恣意的な言動にも、女工たちはたいてい黙って従う。彼女たちにも、時には苦々しさ、怒り、屈辱感がこみあげるが、それでもつとめて気をとるなおす。しかし時には思わず反抗して皆の前でさらに罵倒される目にあう。泣き出しそうなある女工を見てまわりの女工は一緒になって怒るよりも笑いをこらえ、「あれが自分でなくて良かった」という満足感を抱きつつロッカールームでその日のうわさ話をする。「不幸はこっけいなものである。」後のヴェイユは言う。「キリストもこっけいな者として死んだ」のである²⁵⁾。後のヴェイユにとって重要な存在となったキリストは、人々の罪をあがなって死んだ救世主、死んだ後に復活した栄光のキリストではなく、笑い者となって、泥棒と共に十字架上で殺されたキリストであった。しかしその日「犠牲者」だった女工は、次の日には誰かを笑っている側にいることだろう。ヴェイユは日常身の回りで起こる出来事について、疲労をおして書きつづっていた。

工場日記を注意深く読むかぎり、以下のような推測が可能である。女工としての彼女は、工場での日常において肉体的にも精神的にも人間らしい配慮を払われず、そのような配慮を彼女に対して払う必要性を誰も感じていないのが事実であった。それでも彼女の側には自分も人間らしい配慮をしてほしいという感情が消えないのであり、ヴェイユを苦しめているのは、現実とその感情とのうめられない隔たりなのであった。工場内には平等な人間関係が見られない。お互い人間として認めあうという意味における平等が。上司たちは女工たちに対して権柄尽くの態度をやめる内的要因を持ち合わせないし、工場内の力関係は、それを許すのである。なぜ屈辱をうけても反抗しないのか？一方でヴェイユは失業の恐怖、失業中に被るであろう更なる屈辱への恐怖など、女工たちのおかれている経済的・社会的困難について工場技師長への手紙の中で説明している。しかし他方で、彼女がおそらく工場に入らなければ実感できなかったであろう精神状態、虐げられた人に特有の精神的反応も、もう一つの重要な理由である。彼女は工場生活の終わりにこう書いている。

Une oppression évidemment inexorable et invincible n'engendre pas comme réaction immédiate la révolte, mais la soumission.²⁶⁾

このような心理的メカニズムを象徴するような一場面をヴェイユは日記に記録している。ある激しく雨の降る朝、工場の始業前のできごとである。

La porte ouvre 10 mn avant l'heure. Mais c'est une façon de parler. Avant, une petite porte est ouverte dans le portail. À la première sonnerie (il y en a 3 à 5 mn d'int[ervalle]) , la petite porte se ferme et la moitié du portail s'ouvre. Les jours de pluie battante, spectacle singulier de voir le troupeau des femmes arrivées avant que ça « ouvre » rester debout sous la pluie à côté de cette petite porte ouverte en attendant la sonnerie (cause, les vols ; cf. réfectoire) . Aucune protestation, aucune réaction.²⁷⁾

ヴェイユ自身もこの心理的メカニズムから逃れられるわけではない。日記には、たとえば « Jacquot me l'explique gentiment [...] », « Chatel, juste derrière moi, me dit pas trop brutalement [...] » といったような記述がしばしば見られ、ヴェイユが自分に対する他人の態度、口調、扱いに非常に過敏になっている様子がわかる²⁸⁾。

Il [Leclerc] semble mécontent de me voir là (ça se comprend) , et son mécontentement me fait oublier de lui demander des pièces. Après, il se balade dans l'atelier ; je ne veux pas, en allant vers lui, risquer de me faire rabrouer comme l'autre fois ; [...].²⁹⁾

ヴェイユは自分が他人から意にも介されない存在として見られているという事実、できるだ

け触れないですませたいと望んでいるように思われる。この事実は、真正面から見据えるには苦しすぎる。そのため「無感覚のうちに沈み込む」ことになるのだ。というのは、一章の冒頭で紹介したテヴノン夫人への手紙でも書かれていることから考えれば、尊厳の感情、自尊心が拠り所にしてきた「外的理由」は、通常「内的理由」と不可分であるからであろう。「外的理由」とはこれまでの分析から考えれば、肉体的にどのような状態におかれているか、そして他者からどのような扱いを受けているか、である。肉体的な極度の疲労と他者からの粗暴な扱いは、思考を避け、無感覚の内に沈み込むよう、人間を内面的に変えていく。自身についての評価は、外的条件に自然と沿ってくるのである。« Effroi qui me saisit en constatant la dépendance où je me trouve à l'égard des circonstances extérieures. » 「内的理由」、自分の天与の人間の性質だと思っていたものは、すべて、外的理由に依拠したものであったということがわかるのである。こうなると、もう「存在しているのがやっと」という状態になる³⁰⁾。その日その日のできごとに関心が向き、「日常的なことしか考えられなくなる」³¹⁾。つまり、連続的な自己意識をもった個人が考え、語り、感じるというよりも、むしろその場その場でなんとか反応しているといった状態になるということであろう。自分を尊い存在だと思おうにも拠り所がなくなって、そのような問いを發すれば限らない自己輕蔑に陥る以外に道はないのである³²⁾。

それでは、ヴェイユが「取り戻した」と語っている、新しい人間の尊厳の感情は、何に依拠するものなのか。テヴノン夫人への手紙では、「外的な何ものにも依拠せず、何に対しても自分は権利をもっていないのだ」という意識を常に伴っている」感情であると説明されていた。ある人の「権利」とは、結局その人の社会的地位に結びついているものである。他者からの認証があって初めて成立するものなのだ。つまり、どんな権利も人間に内在するものではありえないのであって、外部から付与されるものである。だから人間の条件について考えるならば、外的などんなものにも依拠しない状態をまず想定しなくてははいけない。だから、人間の尊厳、人間が人間を尊いと思える根拠は、社会的状況の中で実質的に何の権利も持ちえない人間を前提に考えなければならぬのであろう。しかしヴェイユ自身がこの新しい尊厳の感情の根拠についてはこの箇所で明確に述べていないので、我々はこの新しい尊厳について考える際に、「工場日記」の別の箇所や、ヴェイユの遺した他のテキストに基づいて、この根拠を推測していくという方法をとることになるであろう。

工場体験を通して培われたヴェイユの感受性は、スペイン市民戦争に義勇兵として参戦した際にも生きている。前述したように、ヴェイユは1936年7月にスペイン市民戦争が始まるとすぐ、一人アラゴン戦線にむけて旅立ち、共和派の義勇兵として少しの間戦いに加わった。ヴェイユは後に作家ベルナノスに手紙を書いて、この市民戦争についての彼女の偽らざる見解を語っているが、この手紙はベルナノスの死後に公開されたあと、カミュや当時の共和派知識人たちの非常な反発を被った。手紙の中で、彼女が共和派兵士の残虐行為を告発しているということが主な理由であった。この事情は、Louis Mercier-Véga の論文「アラゴン戦線のシモーヌ・ヴェイユ」に詳しい³³⁾。ベルナノスへの手紙は、彼女の後期の思索における「力」の概念を予兆するものとなっており、残虐行為における人間心理をめぐるベルナノスとの見解の差異についても興味深い論点

を含んでいるのだが、その点についてここでは詳述しない。

ヴェイユと一緒に闘った共和派義勇兵たちへの愛情と共感とをベルナノスに語りながらも、彼らと彼らの守っているはずの農民達との間に横たわる「断絶」に注目せずにはいられない。

Dans un pays où les pauvres sont, en très grande majorité, des paysans, le mieux-être des paysans doit être un but essentiel pour tout groupement d'extrême-gauche ; et cette guerre fut peut-être avant tout, au début, une guerre pour et contre le partage des terres. Eh bien, ces misérables et magnifiques paysans d'Aragon, restés si fiers sous les humiliations, n'étaient même pas pour les miliciens un objet de curiosité. Sans insolence, sans injures, sans brutalité — du moins je n'ai rien vu de tel, et je sais que vol et viol, dans les colonnes anarchistes, étaient passibles de la peine de mort — un abîme séparait les hommes armés de la population désarmée, un abîme tout à fait semblable à celui qui sépare les pauvres et les riches. Cela se sentait à l'attitude toujours un peu humble, soumise, craintive des uns, à l'aisance, la désinvolture, la condescendance des autres.³⁴⁾

ヴェイユはアラゴンの農民達との会話を戦場でつけていた日記に記録している。この頃アナーキストの支配地域では、あちこちの村で革命がおこなわれ、農業の集産化などの成果が出始めていた。しかし農民達は、ヴェイユが革命に賛成かと尋ねても「委員会のいうとおりにするよ」との返事だ。「必要なものを皆くれるなら」と答える年寄りもいる。この会話の記録にはアラゴンの農民たちの政治に対するある種の無気力が感じられ、ヴェイユは政治の行く末を握っている兵士達に対する農民達の「強い劣等感」について書き留めている。彼女が兵士や農民達の態度の端々に注目し、そこに見られる各々の心理状態に着目していることは、工場生活で培われた感性の所以であろう。農民たちは彼女に、夜も昼も働いているのに食べ物もないような自分たちの貧しい暮らしについても話す。しかし、「ils ont un bon rire en racontant tout ça.³⁵⁾」彼らはあくまでも明るいのである。

(3) 人間関係におけるあたたかさ

同じ虐げられた階層であるとはいっても、アラゴン地方の農民たちとパリの労働者では住んでいる環境も違えば仕事も違うし、人間関係のつくりかたも違うであろう。しかしヴェイユにも、工場の中で幸福な気持ちを味わったことがあった。地下鉄や市街電車につかうボビンをつくる仕事を、アルストム工場の片隅の「かまど」で行っていた時のことである。

Four. Coin tout différent, bien qu'à côté de notre atelier. Les chefs n'y vont jamais. Atmosphère libre et fraternelle, sans plus rien de servile ni de mesquin. Le chic petit gars qui sert de régleur... Le soudeur... Le jeune Italien aux cheveux blonds... mon « fiancé »... son frangin... l'Italienne... le gars costaud au maillet...³⁶⁾

Four. Le premier soir, vers 5 h, la douleur de la brûlure, l'épuisement et les maux de tête me font

perdre tout à fait la maîtrise de mes mouvements. Je n'arrive pas à baisser le tablier du four. Un chaudronnier se précipite et le baisse pour moi. Quelle reconnaissance à des moments pareils! Aussi quand le petit gars qui m'a allumé le four m'a montré comment baisser le tablier avec un crochet, avec bien moins de peines. En revanche, Mouquet me suggère de mettre les pièces à ma droite pour passer moins souvent devant le four, j'ai surtout du dépit de n'y avoir pas songé moi-même. Toutes les fois que je suis brûlée, le soudeur m'a adressé un sourire de sympathie.³⁷⁾

工場の中で人間同士のあたたかさを感じることができた日には、ヴェイユはそのことを嬉しげに日記に書き付ける。「一つの微笑、一言の優しい言葉、ほんのわずかな人間的なふれあい」、「そこでだけ、人間的な友愛の心がどういうものか理解できる」とヴェイユはテヴノン夫人への手紙においても語っている³⁸⁾。ただ、一般に工場での人間関係はたいてい冷たいものであって、そんな機会は非常に少ないのだが。

この「かまど」は、「考察」の中でヴェイユが思い描いていた理想の労働環境に近いものであっただろう。この理想は、「考察」の最初の二章「マルクス主義批判」「抑圧の分析」に続く「自由な社会の理論的概観」の章で示されているものだ。彼女が理想として描くのは、人々が「世界」への直接的な働きかけを通して機械的ではない自由な労働をおこない、そうすることで「世界」は存在し、自分は世界に生きている」という実感を各個人が持つような社会である。

Les hommes seraient à vrai dire pris dans des liens collectifs, mais exclusivement en leur qualité d'hommes ; ils ne seraient jamais traités les uns par les autres comme des choses. Chacun verrait en chaque compagnon de travail un autre soi-même placé à un autre poste, et l'aimerait comme le veut la maxime évangélique. Ainsi l'on posséderait en plus de liberté un bien plus précieux encore ; car si rien n'est plus odieux que l'humiliation et l'avalissement de l'homme par l'homme, rien n'est si beau ni si doux que l'amitié.³⁹⁾

「考察」の最初の二章で、彼女は現代社会における人間関係が欲望と恐怖の情念によって支配されていることを描き出し、人間にとってこうした情念は底なしであることを指摘した。「人間が他の人間たちから受ける満足と苦悩には限界がない。」⁴⁰⁾「考察」の中のこの言葉には、工場やスペイン市民戦争での経験の後にヴェイユの思想にあらわれる「力」の概念へ直結する視点が含まれている。

「考察」において、ヴェイユは、個人の自由を前提とした人間関係を、自由よりもさらに大切な価値として位置づけている。このような個人のありかた、人間関係は、「人間の偉大さ」にふさわしいとも言う⁴¹⁾。「人間の偉大さ」は、個人の「自由」が人間関係に及ぼす影響まで考慮にいられた上で、初めて語ることができるものなのである。このときヴェイユは、「自由」「人間の尊厳」「人間の偉大さ」というこれらの言葉によって、常に同じ理想について語っていると考えてよい。

人間を最も幸福にできるのが人間関係であるとすれば、人間を最も不幸にできるのも人間関係

であろう。ヴェイユが理想として描いているように、同じ人間であること、相手がもうひとりの自分であることを互いに感じながら保たれる、そんな対等な人間関係など現実にはほとんどありはしない。現実の社会の中では、たとえ一見平等な人間関係にみえても、それは互いが人間であることを前提にするというよりは、常にその社会的役割に照らしての関係でしかないことが多いというのが本当のところであろう。「人間として」、人間同士が結びつくということは、簡単なようでいて非常にまれで、可能であるとしても瞬間的なもので、持続的なものではないであろう。

しかし「人間として」というだけでは、曖昧さが残る。「考察」においては、人間同士は互いに「唯一にして同一の理性」⁴²⁾を分かち持つ人間同士として、結びつくことができると考えられている。

「理性」という言葉にどんな意味を含ませるかは、時代によっても人によっても異なるであろうが、少なくとも「考察」におけるヴェイユは、彼女が「自由」の前提としてきた「思考」と同じものとして、この言葉を用いていると思われる。この「理性」を通して見れば、人間同士は決して、疎遠なもの、理解不能なものとはならないと、ヴェイユはきわめてモラリスト的な言い方をしている。この場合、「思考」「理性」が論理的な思考能力のみを厳密に想定しているとは言えないであろうし、もう少し漠然とした含みをもたせて使われている言葉であるかとも思われるが、ヴェイユはその含みについては述べていない。

「かまど」において、ヴェイユに「自由で友愛にみちた雰囲気」を感じさせる、この職場のあたたかさを形作っているのは、ヴェイユのここでの言葉を借りれば、何よりも仲間同士の間にかような「共感」« *sympathie* »であるだろう。体力的に劣っており、経験も知識も足りず、技術的にも未熟である人間、工場内で低い地位しか持っていない人間は、ここでは仲間として受け止められ、ごく自然に手助けされている。そしてこの不均衡な力関係は、ここでは上下関係を生み出してはいない。それぞれが各自の仕事をを行いながら、常に互いの存在を感じており、「人間として」認めあっている。人間同士が自然と相手に共感を見出す前提があつて初めて、人間らしいつながりが可能になる。「人間の尊厳」は、そのようなつながりの中にあるとは言えないだろうか。外的な何ものにも依らない「人間の尊厳」が人間に内在するとして、それが人間の何らかの性質を想定するとすれば、それは社会的な立場によって左右されない要素、そしてまさに互いのうちにこの共感を誘いあう要素にあるのではないだろうか。少なくとも、「考察」において、人間の価値を語るに際し、ヴェイユが人間関係に付与している重要さから推論する限り、このように思われる。

3. 後期の思想へのつながり

ヴェイユは1940年のナチス・ドイツのフランス侵攻によって両親とともにパリを追われ、ユダヤ人法によって教職をも奪われる。彼女は晩年、戦時下の亡命生活の中で、次第に神秘主義的宗教思想に沈潜していく。彼女が自身の思索を書き綴ったノートは、後にCahiersの題名で出版さ

れることになる。彼女はここにキリストへの深い傾倒と思索、祈りを書き付け、またヒンドゥー教、仏教など他宗教の聖典、また様々な民族に伝わる神話や民話について研究し、考察を重ねていった。これらノートの記述や *Attente de Dieu* に収録された論文、バレン神父への手紙を読んでいくと、彼女の後期の思想には、「force」「力」と「amour」「愛」という対立構造が見られることがわかる。「力」という概念は、前章までで我々が検討してきたヴェイユの工場体験を色濃く反映している。ヴェイユの思想において、「力」は自己拡張をその原理とする、この世の必然であるメカニク的な法則の網の目であるとされている。人間の心理も、常に他人を蹂躪することによって自己拡張しようとする、この「必然」のメカニズムに従っている。ヴェイユは工場体験以降、人間関係における力の不均衡が人間をいかに内面的に変えていくかという問題にこだわり、文学作品、聖典などを読んだ時のノートには、このテーマに関わる抜き書きや考察が多い。この問題意識は、1940年に書かれた「*L'Iliade ou le poème de la force*」において初めて明確にされた。この論文では「力は人をものにする」というテーマ、つまり（社会的地位や、経済的力、武力等の）力関係のもとで、弱者が強者の価値観を内面化し、否応なく自分を「もの」のように貶めていくこと、そして強者の側では自然と弱者を自分と対等な人間として見られなくなっていく、自分と同じ人間をまるでものを扱うようになるという心理的傾斜の問題が扱われている。「力」に対する人間の魂の弱さは必然的なものであり、どの人間もこの弱さから逃れることができない。

しかし、この世に悪が存在するのは神の不在を意味するのではなく、神の存在、神の愛の紛れもない証拠であるとヴェイユは考える。「遡創造」「*décréation*」というヴェイユ独自の概念がこの考え方から生まれてくるのである。この世の成り立ちとは、神は絶対善であるが権能をふるうことをせず、身をひき、自らを空しくして他の存在を許した結果と捉えられるのだ。「愛」とは、必然の原理とは異なる（超自然的「*suraturel*」）原理であり、後退の原理、他者を存在させる原理である。それに対して、「力」は他者の存在を奪う原理である。神の「愛の狂気」の人間的かたどりとして、ヴェイユは「隣人愛」「*amour du prochain*」を位置づける。

Le Christ nous a enseigné que l'amour surnaturel du prochain, c'est l'échange de compassion et de gratitude qui se produit comme un éclair entre deux êtres dont l'un est pourvu et l'autre privé de la personne humaine. L'un des deux est seulement un peu de chair nue, inerte et sanglante au bord d'un fossé, sans nom, dont personne ne sait rien.[...] L'homme accepte une diminution en se concentrant pour une dépense d'énergie qui n'étendra pas son pouvoir, qui fera seulement exister un être autre que lui, indépendant de lui. Bien plus, vouloir existence de l'autre, c'est se transporter en lui, par sympathie et par suite avoir part à l'état de matière inerte où il se trouve.⁴³⁾

前章で取り上げた「共感」という言葉がここで用いられているが、この両者は、「不幸への同意」という点において、一つなのであるとヴェイユは言っている。「不幸への同意」、無であることへの同意は、ここで詳述はしないが、ヴェイユの宗教思想の中心概念である。「理性」を媒介にしてこそ人間が一つになりうる、対等になりうるという初期ヴェイユの考え方が、この定義と

は異なったものであることは明らかである。そしてこの変化が工場体験を起点としているということも、また明らかであろう。そしてまた、この点において両者が結びついている場合にのみ、弱者の側が「真の誇り」« *fierté véritable* »を保つことができるのだとヴェイユは言うのである⁴⁰⁾。「尊厳」という言葉は使われていないけれども、自分に誇りをもつということは、工場において問題にされていた「人間の尊厳」の感情を保つことと同義である。

しかしこのような人間同士のむすびつきの前提となる「共感」とは、厳密に言えば、何に対する「共感」なのか。人間は他の人間のどんな要素に対し、共感を覚えるのか。これまでの検討によっても、まだこの「共感」の契機が曖昧なままであるようだ。しかしこの人間が人間のうちに「共感」を誘う要素そのものが「人間の尊厳」の基礎となると考えられるのであるから、この点について、もう少しヴェイユの考えを検討してみる必要はあるだろう。

ヴェイユは最晩年の1942年から1943年にかけて、ド・ゴール率いる「自由フランス」においてレジスタンス運動に加わり、ロンドンの地で膨大な量のテキストを書き上げたが、この中に「人格と聖なるもの」と題された論文がある。これは当時ムーニエらの標榜していた「人格主義」への批判を発端として書かれたものだ。ここに、「共感」の問題を明確にする記述を見つけることができる。

Il y a dans chaque homme quelque chose de sacré. Mais ce n'est pas sa personne. Ce n'est pas non plus la personne humaine. C'est lui, cet homme, tout simplement.

Voilà un passant dans la rue qui a de longs bras, des yeux bleus, un esprit où passent des pensées que j'ignore, mais qui peut-être sont médiocres.

Ce n'est pas ni sa personne ni la personne humaine en lui qui m'est sacrée. C'est lui. Lui tout entier. Les bras, les yeux, les pensées, tout. Je ne porterais atteinte à rien de tout cela sans des scrupules infinis.

ヴェイユは、「権利」と同じ側に「人格」を位置づけている。すなわち、人間に外在的なもの、集団と関わりをもつもの、つまり外的条件によって左右されるもの、いつでも奪い去られるもの、いつでも変化しうるものとして。

Qu'est-ce qui m'empêche au juste de crever les yeux à cet homme, si j'en ai la licence et que cela m'amuse? [...]

Ce qui la retiendrait, c'est de savoir que si quelqu'un lui crevait les yeux, il aurait l'âme déchirée par la pensée qu'on lui fait du mal.

Il y a depuis la petite enfance jusqu'à la tombe, au fond du cœur de tout être humain, quelque chose qui, malgré toute l'expérience des crimes commis, soufferts et observés, s'attend invinciblement à ce qu'on lui fasse du bien et non du mal. C'est cela avant toute chose qui est sacré en tout être humain.

Le bien est la seule source du sacré. Il n'y a de sacré que le bien et ce qui est relatif au bien.⁴⁵⁾

この「聖なるもの」は、人間関係において「共感」という情を呼び起こすような、人間に共通の要素として位置づけられている。「どうして人は私に害をくわえるのか」というキリスト自身ですら抑えられなかった子供らしい嘆き－現実世界における人間のこの素朴な驚きを、ヴェイユは人間の魂の中で社会的な条件を逃れているたった一つのものであると考えるのである⁴⁶⁾。

人間が人間に加える不正に対する素朴な驚きは、ヴェイユの工場での苦しみの一の原因をなしていたであろう「人間らしく扱われたいという欲求と現実との隔たり」に対する驚きとも重なるものである。「尊厳」という言葉こそ用いられてはいないものの、ヴェイユは、工場で失った尊厳の感情にかわる新しい尊厳の感情の根拠を、ここに至ってはっきりと見出したとは言えるかもしれない。

しかし、この驚きですらも、本当にどんな状況下の人間にとっても保ち続けられる人間的特性であるといえるものなのかという疑問はやはり残るのである。この驚きとても、やはり外的状況によって人から失われていくものなのではないだろうか。人間から奪い得ないものはなにもない、と後年のヴェイユは言う。その事実こそが、「人間の惨めさ」であるのだとも。彼女は工場生活を終えた後、工場技師長への手紙で次のように語っていた。

[...]j'ai éprouvé jusqu'au dernier jour que ce sentiment [de la dignité humaine] était toujours à reconquérir, parce que toujours les conditions d'existence l'effaçaient et tendaient à me ravalier à la bête de somme.⁴⁷⁾

この驚きを自分の中に保ち続けるということは、人から一顧だにされない現実と、自身の人間的願望との埋められない隔たりを常を感じ続けなければならないことである。しかしこの埋められない隔たり自体が、救いがたい自己軽蔑へと人間を導くものであったのだ。この自己軽蔑を「精神の死」と後のヴェイユは表現したが、それは、人間にとって自身を大切だと思えない精神状態が、人間性にとって致命的な打撃を与えるという認識があったからだ。肉体的にどのような外的条件にさらされているか、他者が自分をどのように扱うか、工場での生活は、これらのことを超越して自身の価値を守り続ける困難についての経験でもあった。自己軽蔑から身をまもるため、少なくとも自己軽蔑から目をそむけることができるためには、不正に慣れてしまうこと、できるだけ無感覚な状態で日々をやりすごすこと、不正に対する驚きそのものを摩滅させることが必要となる。そして無気力の波にのみこまれ、「考える」習慣が途切れてしまえば、この能力は二度とよみがえらない可能性すらあるだろう。

社会によってつくりあげられた「尊厳」にかわる、別の「尊厳」を保つべきこと。そのことによって、自身の大切さがわかるということ。工場での生活を終えたヴェイユは、新しい尊厳について述べた日記のページのすぐ後に、次のようなフレーズを書き込まずにはいられなかった。

On a toujours besoin pour soi-même de signes extérieurs de sa propre valeur.⁴⁸⁾

結 論

「人間の尊厳」という言葉は、工場体験ののち約一年間にわたって彼女のテキストに頻繁に登場するが、スペイン市民戦争への参戦以後ヴェイユはこの言葉をほとんど使わなくなった。この頃の国際情勢によって、*dignité*という言葉が、真に人間の尊厳を語る言葉としてよりも人間集団の威信をかけての戦いに援用されることが多くなってきたということ、そしてこの言葉の危険な側面をヴェイユが嫌ったということは、この事実についての一つの理由であるかもしれない。1936年初め、ヴェイユは反ファシスト知識人監視委員会の「*Vigilance*」誌に載ったアランの問題提起「名誉や尊厳を命よりも大事と考える人々は、最初にその生命をかける用意ができていだろうか？ そうでないとすれば、その人たちのことを何と考えるか」に対し回答をよせているが、そこにはこう書かれている。「尊厳や名誉とは、おそらく今日用いられている言葉のうち最も兇悪なものであろう。」⁴⁹⁾ またこの回答で、ヴェイユは「尊厳」という言葉の曖昧さを問題にしているが、この曖昧さは、本稿の一章で問題にした二つの尊厳に関わっている。

En réalité, le terme de dignité, appliqué aux rapports internationaux, ne désigne pas l'estime de soi-même, laquelle ne peut être en cause ; il ne s'oppose pas au mépris de soi, mais à l'humiliation. Ce sont choses distinctes ; il y a bien de la différence entre perdre le respect de soi-même et être traité sans respect par autrui. Épicète manié comme un jouet par son maître, Jésus souffleté et couronné d'épines n'étaient en rien amoindris à leurs propres yeux.⁵⁰⁾

スペイン市民戦争で、ヴェイユは集団の狂気を思い知った。この頃から、「尊厳」という言葉はヴェイユのテキストにおいてキーワードとして用いられることはなくなる。最晩年に書かれた『根をもつこと』においては、「労働者の尊厳」という用い方がされているが、この「尊厳」はヴェイユが工場で発見した、真の「人間の尊厳」についての考えをあらわす言葉としてではなく、むしろ社会の中で労働者に付与されるべき権利の一つをあらわす言葉として、位置づけられているのである。しかし、ヴェイユが工場で発見した真の「人間の尊厳」という問題意識は、ヴェイユの思索から消えてしまったわけではないであろう。

なぜなら、この新しい「尊厳」をめぐる苦悩こそが、ヴェイユ思想の後期の展開における重要概念の端緒をなしているからである。「人格と聖なるもの」の論文において、工場における「人間の尊厳」の問題については一つの回答が得られたようにも思える。しかし三章でも見てきたように、結局「人間の尊厳」という感情は、辿り着くことの可能なある静的な精神状態というよりは、厳しい外的生存条件の中にあっては、むしろ各瞬間に苦悩の中で取り返し続けなければならない性質のものなのである。後期の宗教的思索における、無であることへの同意という思想は、この「尊厳」をめぐる思索と直接的につながりを持っていると考えられる。また、ヴェイユが死の直前に書き上げた *L'Enracinement* における「義務」の概念もまた、この「尊厳」の問題についての思索のもう一つの帰結であると思われる。このつながりを確かめることは本稿の目的で

はないが、少なくとも、ここまでの分析によって、晩年のヴェイユの思想をより深く知るための、また、その展開の内的必然性を具体的に示すための、一つの礎を築くことができたのではないと思われる。ヴェーユが短い生涯の中で自らの思想を他者に説得するための著作にとりかかる時間を持てず思索ノートを残したのみであったということからも、彼女が神秘思想に傾いていった内的必然性、その博覧強記ぶりの原動力、真の問題意識を探ろうとするなら、ヴェーユの遺した言葉のひとつひとつを、彼女の思索の内的論理によって照らし出すこと、その言葉を使って語ろうとするヴェイユの本意を常に明確化しようとするのが、今後の研究においてますます必要となってくるであろう。

註 釈

- 1) 本稿は2002年1月に京都大学大学院文学研究科に提出された修士論文「L'évolution de la notion de dignité humaine chez Simone Weil」の、主に一章にあたる部分に加筆・修正をほどこしたものである。
- 2) Charles Moeller, *Littérature du XX^e siècle et christianisme*, I, Casterman, 1954, p.224.
- 3) 大木健『シモーヌ・ヴェイユの不幸論』, 勁草書房, 1969, p.12.
- 4) Patricia Fogarty, « Du problème de la dignité humaine à la vision de la culture populaire » in *Cahiers Simone Weil* (以下CSWと略す), 7, 1984, pp.141-152.
- 5) Simone Pétrement, *La vie de Simone Weil* (以下SPと略す), Fayard, 1973, p.333.
- 6) « Trois lettres à Mme Albertine Thévenon », *La condition ouvrière* (以下COと略す), Gallimard, « Collection Espoir », 1951, p.20-21.
- 7) « Journal d'usine », in *Œuvres Complètes* (以下O.C.と略す), édition publiée sous la direction d'André Devaux et de Florence de Lussy, Gallimard, t.II-2, *Écrits historiques et politiques. L'expérience ouvrière et l'adieu à la révolution (juillet 1934-juin 1937)*, 1991, p.197.なお強調はヴェイユ自身による。
- 8) *Ibid.*, p.178.
- 9) *Ibid.*, p.190. Biolはヴェイユが最初に勤めたアルストム工場の調整工の一人。ヴェイユは「工場日記」において、給料をパーセンテージの形で表記していることが多い。例えばこの引用では3.50F%と書かれているが、これはすなわち3.50F pour 100 piècesという意味である。工場での給与の支払われ方については、「Journal d'usine », O.C.II-2, p.166-168.に詳しく説明されている。
- 10) *Ibid.*, p.192-193.
- 11) 当時ソビエトの動向に詳しくヴェイユとともにソビエト社会主義の批判を行っていたボリス・スヴァリーヌらとヴェイユの関わりについては, Domenico Canciani, « Simone Weil entre fidélité et dépassement A propos du contexte et des sources des <Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale> », in CSW, 21, pp.61-85.を参照のこと。
- 12) « Perspective: Allons-nous vers la révolution prolétarienne ? », O.C.II-1, *Écrits historiques et politiques. L'engagement syndical (1927-juillet 1934)*, 1988, p.278.
- 13) « La pensée est bien la suprême dignité de l'homme. » (« Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale », O.C.II-2, p.90.)
- 14) *Ibid.*, p.73.
- 15) « Perspective Allons-nous vers la révolution prolétarienne ? », in O.C.II-1, p.271.
- 16) « Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale », O.C.II-2, p.96.

- 17) *Ibid.*, p.96.
- 18) *Ibid.*, p.105-106.
- 19) « Rien au monde ne peut nous interdire d'être lucide. » (« Perspective: Allons-nous vers la révolution prolétarienne ? », O.C.II-1, p.281.) また、ヴェイユは「考察」において、「Rien au monde ne peut contraindre un homme à exercer sa puissance de pensée, ni lui soustraire le contrôle de sa propre pensée. » (« Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale », O.C.II-2, p.85.) とも言っている。
- 20) SP, 256-259.
- 21) « Cette situation fait que la pensée se recroqueville, se rétracte, comme la chair se rétracte devant un bistouri. On ne peut pas être « conscient ». (CO, p.21.)
- 22) この表現は、後期のヴェイユ思想の中で重要な役割を果たす概念「不幸」に関する記述を思い起こさせる。「不幸」における人間の反応は、むきだしの死のおぞましさに触れた人間の、反射的な嫌悪に例えられている。「不幸」とは、「精神の死」であり、「魂の底まで真っ赤な鉄で刻印された自己軽蔑」である。「L'Amour de Dieu et le malheur », *Attente de Dieu* (以下ADと略す), Fayard, 1966, p.103.)
- 23) « Lettre à un ingénieur directeur d'usine », CO, p.152.
- 24) Blaise Pascal, *Pensées*, édition présentée, établie et annotée par Michel Le Guern, Gallimard, « Folio Classique », 1977, p.106.
- 25) « Le Christ était un malheureux. Il n'est pas mort comme un martyr. Il est mort comme un criminel de droit commun, mélangé aux larrons, seulement un peu plus ridicule. Car le malheur est ridicule. » (« L'Amour de Dieu et le malheur », AD, p.107-108.)
- 26) « Journal d'usine », O.C.II-2, p.218.
- 27) *Ibid.*, p.223.
- 28) *Ibid.*, p.197. Jacquot はアルストム工場の調整工の一人、Chatel は班長である。
- 29) *Ibid.*, p.247. Leclerc はヴェイユが3番目に勤めたルノー工場の調整工の一人である。
- 30) « La vie et la grève des ouvrières métallus », O.C.II-2, p.355.
- 31) « Lettre à Boris Souvarine », CO, p.16.
- 32) ヴェイユは、強者の価値観を内面化していく弱者の心理的傾斜について、「力」という概念を用いて後に分析することになる。1940年の終わりから41年の始めにかけて「Cahiers du Sud」誌に掲載された論文「L'Iliade ou le poème de la force」には次のような一節が見られる。「Les êtres humains autour de nous ont par leur seule présence un pouvoir, et qui n'appartient qu'à eux, d'arrêter, et de réprimer, de modifier chacun des mouvements que notre corps esquisse ; un passant ne détourne pas notre marche de la même manière qu'un écrivain, on ne se lève pas, on ne marche pas, on ne se rassied pas dans sa chambre quand on est seul de la même manière que lorsqu'on a un visiteur. Mais cette influence indéfinissable de la présence humaine n'est pas exercée par les hommes qu'un mouvement d'impatience peut priver de la vie avant même qu'une pensée ait eu le temps de les condamner à mort. Devant eux les autres se meuvent comme s'il n'étaient pas là ; et eux à leur tour, dans le danger où ils se trouvent d'être en un instant réduits à rien, ils imitent le néant » (« L'Iliade ou le poème de la force », O.C.II3, p.230-231.) 「力」は人間をものにする」というこの論文の中心テーマは、「力」を媒介にした人間関係は、弱者ばかりでなく強者をも「もの」にすること、また、「力」によって強者の行動の中にも「思考」の入る隙がなくなるという心理的メカニズムについても分析している。
- 33) ヴェイユのスペイン市民戦争参戦については、Louis Mercier-Véga, « Simone Weil sur le front d'Aragon », in *Les écrivains et la guerre d'Espagne*, dirigé par Dominique de Roux, Les Dossiers H, 1973, pp. 275-282. を参照のこと。また、この論文への反論 Domenico Canciani, « Débats et conflits autour d'une courte expérience ou les guerres d'Espagne de Simone Weil » in CSW, 13, 1990, pp.375-405. も合わせて参照のこと。

- 34) « Lettre à Bernanos », *Écrits historiques et politiques* (以下 EHP と略す), Gallimard, « Collection Espoir », 1957, p.223-224.
- 35) « Journal d'Espagne », EHP, p.210-211.
- 36) « Journal d'usine », O.C.II-2, p.182.
- 37) *Ibid.*, p.183.
- 38) « Trois lettres à Mme Albertine Thévenon », CO, p.22.
- 39) « Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale », O.C.II-2, p.86.
- 40) *Ibid.*, p.83.
- 41) *Ibid.*, p.90.
- 42) *Ibid.*, p.85-86.
- 43) « Formes de l'Amour implicite de Dieu », AD, p.133. « Celui qui traite en égaux ceux que le rapport des forces met loin au-dessous de lui leur fait véritablement don de la qualité d'être humains dont le sort privait. Autant qu'il est possible à une créature, il reproduit à leur égard la générosité originelle du Créateur. » (*Ibid.*, p.130.)
- 44) *Ibid.*, p.134.
- 45) « La personne et le Sacré », *Ecrits de Londres et dernières lettres*, Gallimard, « Collection Espoir », 1957, p.12-13.
- 46) 「アメリカノート」には、次のような記述も見られる。« Pour aimer inconditionnellement les hommes, il faut voir en eux des pensées soumises aux lois mécaniques de la matière, mais ayant pour vocation le bien absolu. L'aspiration au bien, qui existe chez tous les hommes — car tout homme désire, et tout désir a pour objet le bien — l'aspiration au bien qui est l'être même de chaque homme est le seul bien toujours inconditionnellement présent en tout homme. (« Cahiers d'Amérique », *La connaissance surnaturelle*, Gallimard, « Collection Espoir », 1950.)
- 47) « Lettre à un ingénieur directeur d'usine », CO, p.133.
- 48) « Journal d'usine », O.C.II-2, p.254.なお強調はヴェイユ自身による。
- 49) « Réponse à une question d'Alain », O.C.II-2, p.329.
- 50) « Réponse à une question d'Alain », O.C.II-2, p.330.この回答は1936年3月頃に書かれたものであるが、ペトルマンの伝記によれば、ヴェイユはこの頃ブルジュ女子高等学校における哲学講義でもこのテーマを取り上げていたようである。ペトルマンはこう述べている。« Il y avait peut-être, dans son enseignement de cette année-là, un son nouveau : un son de plainte retenue. Auparavant, le sentiment qui dominait, quand elle parlait des problèmes sociaux, était plutôt indignation. » (SP, p.362.)